

統合失調症患者においてアリピプラゾールは他の非定型抗精神病薬と異なる認知プロファイルを有する The cognitive profile of aripiprazole differs from that of other atypical antipsychotics in schizophrenia patients

堀輝、吉村玲児、香月あすか、林健司、杉田篤子、中野和歌子、中村純

産業医科大学医学部精神医学教室

[Journal of Psychiatric Research 2012年 46巻 757-761頁]

【目的】

統合失調症患者における認知機能障害は、患者の社会機能予後に対して精神症状以上に大きな影響を及ぼす。我々は、統合失調症患者を対象に、処方パターンと認知機能の関係について検討し、非定型抗精神病薬単剤で治療を行っている患者群のみが認知機能障害が軽度だったことを報告した (Hori et al. 2012)。今回、非定型抗精神病薬である、リスペリドン (RIS)、オランザピン (OLZ)、アリピプラゾール (ARP) の単剤治療で維持治療が行われている患者の認知機能障害について3薬剤間の相違を検討した。

【方法】

産業医科大学病院神経・精神科外来通院中の統合失調症患者の中で RIS (36例)、OLZ (33例)、ARP (32例) の単剤治療が行われている101例を対象とした。それぞれの治療群の、性、年齢、教育歴を調べ PANSS (Positive And Negative Syndromes Scale) による精神症状評価、BACS-J (Brief Assessment of Cognition in schizophrenia Japanese language version) による認知機能評価を行った。本研究は、産業医科大学倫理委員会の承認を受けており各患者からは口頭および文書による同意を得ている。

【結果】

(1) RIS、OLZ、ARP の各治療群の BACS-J スコアは、ワーキングメモリの項目で ARP が RIS と比較して有意に成績が良かった。(2) RIS、OLZ では投与量と BACS-J の composite score に負の相関を認めた。一方、ARP では投与量との有意な相関は認めなかった。(3) BACS 下位項目での比較では、RIS では RIS の投与量と言語性記憶、運動機能、注意と処理速度の間に負の相関を認め、その他の項目では有意な相関は認めなかった。OLZ では OLZ の投与量と言語性記憶、運動機能の間に負の相関を認めた。一方 ARP では、どの項目においても投与量と各課題の間に有意な相関は認めなかった。

【考察】

今回の結果から、RIS や OLZ が用量依存的なドパミンの D2 受容体遮断作用による認知機能に対する影響であると考えられる。一方 ARP はドパミン D2 受容体の partial agonist 作用や 5-HT_{1A} 受容体 partial agonist 作用を有する薬剤であり、今回の結果はそのような3薬剤の薬理的な作用機序の相違に起因している可能性も考えられる。

【結論】

RIS や OLZ の高用量で治療されている患者は、認知機能レベルが悪く特に RIS 治療では言語性記憶、運動機能、注意と処理速度の項目で、OLZ 治療では言語性記憶、運動機能の項目で顕著である。一方 ARP は投与量と認知機能の関連は無関係である。以上のことから ARP は他の非定型抗精神病薬と比較して異なる認知機能への作用プロファイルを持つ可能性が考えられる。